

アナフィラキシー

英語名 : Anaphylaxis

A. 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるというものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

「アナフィラキシー」は、じんま疹などの皮膚症状、腹痛や嘔吐などの消化器症状、息苦しさなどの呼吸器症状が複数の臓器に同時にあるいは急激に出現する過敏反応で、医薬品によって引き起こされる場合があります。造影剤、血液製剤、抗菌薬、抗がん剤、解熱消炎鎮痛薬、一般用医薬品（市販薬）などでみられる場合があるので、何らかのお薬を使用していて、次のような症状がみられた場合には、近くにいる医療スタッフに申し出るか、すみやかに医療機関を受診してください。

「皮ふの赤み」、「じんま疹」、「のどのかゆみ」、「吐き気」、「くしゃみ」、「せき」、「ゼーゼー」、「声のかすれ」、「息苦しさ」、「どうき」、「ふらつき」など

※アナフィラキシーを疑う場合は、直ちに救急車で医療機関を受診してください。

1. アナフィラキシーとは何ですか？

食物、ハチ毒、医薬品などにより、過敏反応が複数の臓器に同時にあるいは急激に出現することをアナフィラキシーと言います。血圧の低下を伴い意識レベルの低下（呼びかけに反応しない）や脱力を来すような場合をアナフィラキシーショックと呼びます。

医薬品によるものは、多くの場合、投与後 30 分以内にアレルギー症状が出現します。年間で 1000 例以上が発生していると推測され、頻度の多い医薬品には、造影剤、血液製剤、抗菌薬、抗がん剤、解熱消炎鎮痛薬などがあります。

食物アレルギーがある場合には、卵由来の成分を含む塩化リゾチーム、牛乳由来蛋白を含むタンニン酸アルブミン、乳酸菌製剤、経腸栄養剤で起こることがあります。

2. 早期発見と早期対応のポイント

医薬品の投与開始直後からときには 5 分以内、通常 30 分以内に症状があらわれます。注射薬では症状発現が特に早く、内服薬ではやや遅れる傾向があります。過去に複数回、安全に使用できた医薬品でも、アナフィラキシーを発現することがありますが、初回投与時に生じることもあります。

アナフィラキシーの症状には、「皮ふの赤み」、「じんま疹」、「皮ふのかゆみ」などの皮膚症状、「のどのかゆみ」などの粘膜症状、「腹痛」、「吐き気」、などの消化器症状や、「くしゃみ」、「せき」、「ぜーぜー」、「声のかすれ」、「息苦しき」などの呼吸器症状があり、「顔色が悪い」、「意識障害」などのショック症状が出現してくることもあります。

これらの症状がみられ医薬品を使用している場合には、近くにいる医療スタッフに申し出るか、すみやかに最寄りの医療機関を受診してください。

「息苦しき」などの呼吸器症状や「顔色が悪い」などのショック症状がある場合は、一刻も早く治療しなければなりません。医療機関の外におられた場合には救急車を呼ぶことが大切です。

小児の場合には、大人のように症状が明確でない場合や、症状を正確に自分で訴えることができないために注意が必要です。何となく不機嫌、元気がない、寝てしまうなどということがアナフィラキシーの初期症状であることもありますので、大人よりも注意深い観察が必要です。

(参考) その他知っておいた方がよいこと

息苦しさなどの呼吸器症状がみられれば、まず、アドレナリン（エピネフリン）という薬の筋肉内注射（通常 0.3~0.5 mL）を行います。一度アナフィラキシーを経験された患者さんでは、再度の暴露を避けるとともに、アドレナリン自己注射薬（エピペン[®]）の携帯を推奨しています。小児科、アレルギー科、皮膚科などの専門家にご相談ください。ただし、他の疾患の合併及び治療のために薬を服用されている場合には、アドレナリンの使用には注意が必要ですので、その旨を当該医療スタッフにお伝え下さい。

すでにご自分でエピペン[®]をお持ちの場合で、医療機関外におられた場合、あるいは医療機関にいても医療スタッフの対応が遅れるような場合には、エピペン[®]を自己注射することが望まれます。エピペン[®]は図1のように使用しますが、具体的な使用法は医師から指導してもらいましょう。また一般向けエピペン[®]の適応（表1）に示した症状がひとつでもあればすみやかにエピペン[®]を使用してください。

エピペン[®]をお持ちでない場合には、お手持ちのお薬、例えば発作止めの気管支拡張薬の吸入や抗ヒスタミン薬、ステロイド薬の内服を行うこともよい手です。

アナフィラキシーでは、一見軽症でも状態が変化することがしばしばおこり、急激に状態が悪化することがあります。時間が経過していても、何らかの症状があればできるだけ早急に医療機関に受診してください。

なお、アナフィラキシーを起こしやすい方は、他の医薬品でアレルギー反応の既往のある方、食物アレルギー、ぜんそく、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎、アナフィラキシーなどアレルギー疾患の既往のある方などです。

アナフィラキシーの徴候や症状を感じたときに、太ももの前外側に速やかに注射してください。
 ここではエピペン注射液0.3mgを用いて使用方法を説明しています。エピペン注射液0.15mgも同じ使い方です。
 お尻や腕には絶対に注射しないでください。
 もしも、誤ったところにエピペンを使用してしまったら、直ちに最寄りの医療機関を受診してください。

アナフィラキシーがあらわれたら

★誤注射を避けるための正しい持ち方

- オレンジ色のニードルカバーの先端に指などを押し当てると、針が出て危険です。絶対に行わないでください。
- 危険ですので絶対に分解しないでください。

正しい
持ち方



1 準備

携帯用ケースのカバーキャップを指で押し開け、エピペンを取り出します。
 オレンジ色のニードルカバーを下に向けて、エピペンのまん中を片手でしっかりと握り、もう片方の手で青色の安全キャップを外し、ロックを解除します。



2 注射

エピペンを太ももの前外側に垂直になるようにし、オレンジ色のニードルカバーの先端を「カチッ」と音がするまで強く押し続けます。太ももに押し付けたまま数秒間待ちます。エピペンを太ももから抜き取ります。



患者本人以外が投与する場合

注射時に投与部位が動くとき注射部位を損傷したり、針が曲がって抜けなくなったりするおそれがあるので、投与部位をしっかりと押さえるなど注意すること。

3 確認

注射後、オレンジ色のニードルカバーが伸びているかどうかを確認します。
 ニードルカバーが伸びていれば注射は完了です（針はニードルカバー内にあります）。



4 片付け

使用済みのエピペンは、オレンジ色のニードルカバー側から携帯用ケースに戻します。



「エピペン®を処方された患者様とご家族のためのページ」より抜粋 <https://www.epipen.jp/howto-epipen/use.html>

図1 アドレナリン自己注射薬（エピペン®）の使い方および指導

表1 一般向けエピペン®の適応（日本小児アレルギー学会）

エピペン®が処方されている患者でアナフィラキシーショックを疑う場合、下記の症状が一つでもあれば使用すべきである。

臓器			
消化器	繰り返し吐き続ける	持続する強い（がまんできない）おなかの痛み	
呼吸器	のどや胸が締め付けられる	声がかすれる	犬が吠えるような咳
	持続する強い咳込み	ゼーゼーする呼吸	息がしにくい
全身	唇や爪が青白い	脈を触れにくい・不規則	
	意識がもうろうとしている	ぐったりしている	尿や便を漏らす

※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、このホームページにリンクしている独立行政法人医薬品医療機器総合機構の「医療用医薬品 情報検索」から確認することができます。

<https://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>

※ 独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく公的制度として、医薬品を適正に使用したにもかかわらず発生した副作用により入院治療が必要な程度の疾病等の健康被害について、医療費、医療手当、障害年金、遺族年金などの救済給付が行われる医薬品副作用被害救済制度があります。

（お問い合わせ先）

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 救済制度相談窓口

<https://www.pmda.go.jp/kenkouhigai.html>

電話：0120-149-931（フリーダイヤル）[月～金]9時～17時（祝日・年末年始を除く）